

江東区の伝統工芸

人形頭製作

(にんぎょうかしらせいさく)



にんぎょうかしらし ひなかざ しょうき
人形頭師は、おもに雛飾りや鍾馗様の頭部分を製作します。
頭の木型で、桐の粉の頭を抜き、頭に目を入れます。上から、胡粉
とニカワを練ったものを塗り、練った胡粉を用いて顔を立体的
にします。目・鼻・口を小刀で削り出し、練った胡粉で耳の部
分を盛り上げ、形を整えます。顔の表面を水拭きし、目・鼻・
口を小刀で細部まで成形します。ここに頭師の個性が発揮され
ます。それに、上塗胡粉をゼラチンで溶いたものを3～5回塗
り、小刀で最終的な修正を行います。最後に面相を描き上げま
す。

現在、江東区無形文化財保持者の小島孝司氏が伝統の技を伝えています。

展示品

鍾馗（しょうき）



製作者紹介

小島孝司氏は、人形頭師おいかわえいほうの及川映峰氏に師事し、独立後は頭師として人形結髪師けっぱつしの父・一男氏とともに仕事を続けました。

日本人形は複数の職人が分業して一体を仕上げますが、現在孝司氏は一体を一人で仕上げています。孝司氏は、型づくりから結髪にいたるまでの技術を有する数少ない職人の一人です。

鍾馗とは？

鍾馗しょうきは、中国で疫病えきびょうをはらう神として信仰され、その画像は魔除けとしての効き目きめがあるとされています。

言い伝えでは、唐の玄宗皇帝が病にかかった時、夢の中にあられた大鬼が皇帝をからかう小鬼をつかまえて食い殺したので、何者かと尋ねたところ、その大鬼は鍾馗かきよといい、科挙（役人登用試験）に落ちて自殺ていちょうしたが丁重ほうむに葬られた恩を返すために天下の災わざわいを除く誓ちかいを立てたと答え、夢からさめた皇帝は病がすっかり治なおっていることに喜んで、鍾馗の絵を描かせて悪霊あくりょうや邪鬼じゃきをはらう守り神としたといえます。

よく見られる図柄は剣を振りかざした武人の姿で、コウモリと一緒に描かれることもあります。暗闇くらやみでも自由に飛べるコウモリは、鍾馗の道案内をして、暗所ようかいにいる妖怪を見つけ出す能力があるとされています。

日本では、室町時代以降に信仰されるようになり、端午たんごの節供せつくに飾る幟かざに描かれたり、武者人形として作られました。また、疱瘡除けや麻疹除けの呪ましんよいとして、鍾馗を描いた絵が多く刷ましなられました。疱瘡絵は、疱瘡神きらが嫌う赤色で刷った鍾馗の絵を部屋すに飾り、治ると燃やしたり、川に流したりしました。

